

急性代謝障害時の

経 静 脈 栄 養 法

編集 H. A. Lee

訳 山本 政勝 関西医科大学教授
藤田 忠義 愛知医科大学教授
森末 新一 医学博士
谷川十三生 医学博士
須山 忠和 医学博士

札幌医科大学教授

早 坂 滉

この度、H. A. Lee 編集による「Parenteral Nutrition in Acute Metabolic Illness」が翻訳されて「急性代謝障害時の経静脈栄養法」という日本語版の本が上梓された。翻訳者はその道の権威である山本関西医大教授、藤田愛知医大教授、ミドリ十字の森末、谷川、須山医博である。この本は、Wretlind, Wilkinson, Johnston, Peastone 等の13人の doctor で主に England のその道の大家と Sweden, Norway の人たちが加わり、分担執筆になるものである。

元来、栄養は経口的に与えるものであるが、われわれ手術患者等を扱う場合において食事がとれない、あるいは食事をとることが好ましくないという状態の場合にあっても経口的あるいは経鼻的に栄養を与えるということが理想的ではあるが、それが不可能の場合や出来ない場合に経静脈的にいわゆる輸液を行なうことによって水分電解質などのバランスをとるわけで、これらについては古くから行なってきた。しかし、

さらに積極的に経静脈的に栄養を与えるということが必要になり、近年はことに高カロリー輸液が行なわれるようになってますますその重要性が高まったといえる。したがって、これらの特性やその代謝等について広く知識を要求されるのである。現在、数多くの研究によりこれらの点が解明されつつあり、parenteral nutrition の有効性が高く評価されている。

本書は6編に分かれており、そのうち輸液剤についての基礎的な問題についてまず3分の1のページ数がさかれその各々について説明されている。とくにアミノ酸、脂肪、ブドウ糖あるいは電解質、エネルギー等について多彩の項目にわたって簡明にかつわかりやすく述べられており、非常に理解しやすい。とくにこの中でも小児、新生児に対するparenteral nutrition の基礎的な問題が取り上げられている。これらの基礎的事項とともに、生体が侵襲あるいは傷害にあった時の病態生理につ

いてのべてあり、とくに環境条件あるいは内分泌の反応といったものについても簡潔に説明されている。臨床的にはとくに高カロリー輸液の場合の静脈栄養についてもべられているが、幼小児の問題にもかなりのページ数にわたり言及されており、いろいろの病態とくに火傷時の栄養についてもべられている。また、完全静脈栄養についての手技あるいは輸液計画等については症例をあげて説明がなされ、ことに合併症に対する処置やあるいはその補正といった点も詳しくのべられているのが目立つ。最後に、耐容性や毒性の問題について言及しているが、とくにこの著者らが欧州の人達であることもあり、脂肪乳剤についての研究成績あるいは詳しい事実が説明されておりこれらは非常に参考になる。

山本教授も「訳者のことば」で述べられているが、内容の新鮮さ、豊富さに驚嘆したこと、またこの分野でのまとまった本があまり出版されていないとのことであるが、誠にその通りである。一般にこの種の本は項目が少ないわりに説明が長すぎるのが常であるが、この本は非常に細かい項目のもとで、簡明にかつ理解しやすく説明されており、一気にこれを読むことができ、高カロリー輸液を行なうにあたって非常に参考になる。また各項目別の最後に豊富な文献がのせてあるのが便利である。われわれ外科領域をはじめとして輸液を行なうものには是非一読をおすすめしたい本である。

A 5 / 頁 530 / 図 41 / 1976 / 円 8,000 / 〒200 / 医学書院刊